

ジョン・ル・カレ 元イギリススパイ。

2020年12月・眞鍋由比

ジョン・ル・カレが12日に亡くなりました(89歳)。イギリスのスパイ小説家。彼はなんとM16に勤務していました。『寒い国から帰ってきたスパイ』(1963)で007のような華やかなアクションエンターテインメント的なものと違い、新しいスパイ小説として絶賛されました。そりゃリアルなはず。自分の経験が活かれますからね。冷戦時代の諜報戦の実態と等身大のスパイを描いています。CWAゴールド・ダガー賞、MWA(アメリカ探偵作家クラブ)長編賞、サマセット・モーム賞を受賞。「いまのところ、現実を知る人から、実態を暴露したなと責められたことはない。これは誇らしいことだ」とは本人の言。その後『ティンカー・テイラー・ソルジャー・スパイ』(74)で1984年にはMWA巨匠賞、88年にはCWAダイヤモンド・ダガー賞を受賞しました。

これは映画【裏切りのサーカス】の原作。シャーロックのカンバーバッチやダーシーのコリン・ファースが出ています。村上春樹著『村上さんのところ』新潮文庫(2015)の#051おすすめの海外作家は?の部分でカズオ・イシグロ(ノーベル賞作家)が「ハルキ、あの映画の筋わかった?」「ぼくはあの原作を二度読んでいるからだいたいわかるよ」と言う。「ぼくはあれ、筋がほとんどよくわかんなかったよ」と少し悲しそうな顔で答えたそうです。国の情勢、人間関係が複雑に絡み合っ、その中でイギリスの身内を裏切っているスパイを探り出す話です。登場人物が多く、原作を読んでいないと、かなり難しい映画だと思います。イシグロさんがわからないくらいなので、もし筋がわからなくても心配しないで(笑)。でも理解したければ原作を読んでから見るといいでしょう。原作にはスマイリーがスパイを志した少年時代のエピソードもでてきます。この映画はアマゾンプライムで見られるので、興味があればどうぞ。



ル・カレのもう一つの作品『ナイロビの蜂』は問題作です。妻の謎の行動から浮気を疑っていた外交官の夫ジャスティン。妻テッサは殺されてしまいます。弁護士の妻は、実は製薬会社の陰謀を暴こうとしていました。その会社はアフリカの村で無料で医療を提供するかわりに、新薬の治験に参加してもらっていた。一見悪い話ではないようだが、その実験で副作用を起こして死んでしまった村人たちの痕跡は消されていた。そして、ジャスティンがその事実をつきとめたとき、ジャスティンの同僚もその製薬会社の陰謀に加担していたことを知ってしまいます。最後の最後まで妻を愛そうとしたジャスティンの選択は?

映画も素晴らしく、テッサを演じたレイチェル・ワイズはとても魅力的で、これでアカデミー賞助演女優賞を獲っています。世間知らずだけど誠実な夫はレイフ・ファインズが好演。

この製薬会社のモデルが、新型コロナのワクチンを作ったファイザー製薬だといわれています。途上国の人々が犠牲になって先進国の健康を支える?それは倫理的に許されること?現在でも大きな問題です。どう思います?

ところで昨年に引き続き、今年もブックサンタに参加しました。町田尚子『ねこはるすばん』、ラストシーンの猫ちゃんがあまりにもかわいらしくてこの本にきめました。

ブックサンタは「厳しい環境に置かれている全国の子どもたちに、サンタクロースが本を届ける」運動で、書店で自分が贈りたい本を選んで、カウンターで「ブックサンタで」と言ってお金を払うとステッカーがもらえて、その本をこどもさんにとどけてくれます。HPに参加している書店が載っています。神戸近辺だとジュンク堂がそうです。よければぜひ参加してみてください。

